



Think  
the future  
by myself.

ぼくたちの未来のために。  
everblue vol.31 special issue

everblue staff  
なりきよ

X 高校生



### class 03

高校生が見た国際会議

COP10で考えた。

ぼくらの地球はどうなるの？

10月、名古屋市で行なわれた第10回生物多様性条約締約国会議、通称COP10。

この国際会議と同時に開催された「子どもCOP」と、「生物多様性フェア」では、高校生が活躍していた。

国際会議の大舞台と、そのサイドイベントへの参加。それぞれに持ち帰った“学び”を聞いてみた。

文：成清 陽、新海洋子 Text by A.Narikiyo, Y.Shinkai  
写真：成清 陽 Photo by A.Narikiyo 写真協力：愛知県



「最初は推薦入試に有利  
かな」と思つて。今は火  
がついちゃいました」

気の強そうな表情が緩み、南山国  
際高校2年生の有馬くんは、えへへ  
と笑う。今まで彼は、生物多様性を  
テーマとして国内外のユース代表と  
意見を交わす「生物多様性アジアユ  
ース会議in愛知2009」や「生物  
多様性国際ユース会議in愛知201  
0」に参加してきた。当初、会議の  
内容はわからなかつたそう。

無理もない。環境問題の知識や経験をもとに国内外の若者と話しあい、アクションプランやステートメント(宣言文)を作成するといふ高度な内容だからだ。

今秋、彼はCOP10と時を同じくして開催された「子どもCOP10あいち。なごや国際子ども環境會議」(以下子どもCOP)で、国内外の小中学生が集う国際会議の総合会員を務めた。

「生物資源を持続的に得られるようになるには『生物が生息している場所をよりよくするため』など分科会では、通訳もしました。そして、大人へのお願いと、子どもたちにできることを成果としてまとめたんですが……」

彼は妥協しておらず、すでに来年のことを考えている。

「来年は司会だけじゃなく、すべての運営そのものもぼくらユースに任せ付金で、子どもひとりにつき1本の木を植えるプロジェクト『a child

COP10会場近くの白鳥公園で開催された「生物多様性フェア」。多様なブースが並ぶなか、IUCN(国際自然保護連合)のブースで通訳として活動したのが、有馬くんと同じ南山国際高校2年の江端さん。

「ブースに来たケニアの方が、親の寄付金で、子どもひとりにつき1本の木を植えるプロジェクト『a child

す。でもやっぱり利益があつて。

語調も『urge』(強力に推進する)よりも弱い、『request』(要求する)

が採択文書案によく出でました。野

心的な内容じゃなかつたですね」

だが、ふたつのCOPを通じて得たものもある。彼は自信を込めて締めくくつた。

「子どもだと難しい意見はいえないけれど、ぼくらユース世代は利害に関係せずに大人と同じ目線で考えられ

せてほしいです。最低2泊以上して、目標を決めて参加者とスタッフが納得いくまで話しあいたい。今年はできなかつたけど、子どもは大人と違う視点を持つているからこそもっと意見を大事にして、ステートメントはCOP10をこう振り返る。

「参加国が生物多様性を守るうつていう同じ船に乗れたのは良かったで

青く輝かせ続けるために。

るんです。純粋に生物多様性などのことを考えて意見を出せるから、どちらが大事なんだと実感しました」

両親があきれるほど国際環境會議にハマった高校生。その純粋さを、私たち大人も見習いたい。地球を、

青く輝かせ続けるために。

るんです。純粋に生物多様性などのことを考えて意見を出せるから、どちらが大事なんだと実感しました」

両親があきれるほど国際環境會議にハマった高校生。その純粋さを、私たち大人も見習いたい。地球を、